

「土の器に宝を盛る」

コリントの信徒への手紙 二 4章7節～15節

説教 軽込 昇牧師

私たちは「土の器」である。初代教会の伝道者パウロが用いた言葉です。この表現は、私たちを惨めなつまらないものとして描くために用いられたものではありません。脆く壊れやすい土の器に過ぎない私たちは、しかしそこに、主イエス・キリストという宝を高く盛り上げていただいている土の器である、これが私たちクリスチャンの自己理解です。

土の器という言葉には三つの意味があります。第一には、人間は土から作られた存在であるという旧約聖書・創世記の言葉に結びついています。最初の人間を「アダム」と言いますが、これは彼が作られた土「アダマ」から来ています。

「主なる神は土(アダマ)のちりて人(アダム)を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった。」(創世記2章7節)

ごく普通にある土、やがてボロボロと崩れて元の状態に戻ってしまうような土で造られた私たちに、神は命の息を吹き込んで、生きた者にしてくださいました。私たちを、ご自分に向き合う存在としてお造りくださったのです。

土の器であるという第二の意味は、人間が土としての性質を、否応無く抱えている存在だということです。私たちの人間としての脆さ、人間の限界性にパウロも嫌という程、苦しみました。私たちが土の器であること、土としての性格を持つことは、神に向き合わない限り、真剣には受け取れないことです。神との関係を通して、初めて素直に土の器であるということを受け入れることができます。人間が何者であるかということは、神に向き合わなければ見えてはきません。

土の器であるという第三の意味は、神様によって造られた存在である、そして何よりも神様はこの土の器に、キリストという宝を盛ってくださっているということです。私たちは土の器以上のものでも、それ以下のものでもありません。しかし、この土の器に神様が宝を盛ってくださることによって、この土の器をもっと優れたものとして、私たちは受け取ることができます。反対にその宝を無視すれば、私たちは土の器以下のものになります。

聖書は、この脆い土の器に、神が命の息を吹き入れてくださったことを、人間理解の根底においています。私たち人間は、土で造られたと

いうことを骨の髄までまといながら、命の息を吹き込んでいただき、神に向き合う存在として造っていただきました。その上、罪を犯して命の息を失い、谷間一面を満たす枯れた骨(エゼキエル書37章)にしか過ぎなくなった私たちのために、主イエス・キリストが十字架におかかりくださり、復活して、もう一度、命の息を吹き入れてくださった存在、それが私たちです。

キリストが宝であるということは、キリストが復活されているということに他なりません。土である私たちも、キリストの復活に繋がっています。私たちは神様を相手として、神様に向き合う時、初めて自分自身を素直に受け取ることができます。言い換えれば、神様に向き合わない限り、私たちは自分自身を素直に受け入れることもできません。私たちが素直になれないということも、土としての性質かもしれません。

神の前の反抗している私たち、素直さとは反対に、強情で頑(うなじ)強(こわ)き私たちを素直にさせてくださるのが、聖霊としての神ご自身です。私たちの力で、信じることができるではありません。信じることも、神様からのプレゼントです。私たちは、「信じることができるようにして下さい、神様、聖霊を送ってください。」そのように祈って、共に歩いていくしかありません。神は、主イエス・キリストによって、土の器である私達をも復活させてくださいます。そこに最大の恵みがあります。キリストという宝が盛り込まれた者として、私たちが受け入れることで、私たちは神に愛された者として自分を愛おしむことができます。

ミサ曲は冒頭で「主よ、憐れみたまえ」(キリエ・エレイソン)と歌います。ラテン語で歌われるミサ曲で、この「主よ、憐れみたまえ」だけはギリシャ語です。キリスト教の信仰は信じ、祈る宗教です。どんな人間でも「神様」と祈り、「主よ、憐れみたまえ」と訴えることのできる幸いがあります。

私たちは、自己ではなく神に憐れみを乞い、イエス・キリストという宝を盛っていただいている土の器として、素直に自分自身を神様の前に差し出して生きる歩みをしてまいりましょう。

(記 説教要約奉仕者)